

消滅点

岡本俊弥



まもなくN県との県境だった。

原田はニット帽を目深に被りなおし、もういちど装備をたしかめた。リュックの中にはたいしたものは入っていない。飲料水、乾パンを含む数日分の食料、火がほしいところだが可燃物は危険だった。

これだけが頼りか。

そうつぶやくと、腰に差したナイフを抜いてみた。刃先が鈍く光を反射した。セラミックの刃だ。肉厚で切れ味はそこそこあるが、金属と比べると脆い。大事に扱わないと、もう代りは入手できないだろう。

ちょうど正午になるくらいのはずだ。しかし、分厚い雲が垂れこめ、日没間際によ

うな暗い空だ。風の音が聞こえる以外、周囲は静まりかえっている。雲は、西に向かって急速に動いていた。

原田はなぎ倒された木を避けながら、丘陵を越える山道を歩いてきた。ここに来るまで、国道や自動車道路を試してみたが、歩けるところは少なかった。横転し、仰向けになった車両や、建物の残骸が至るところで道路を塞いでいるのだ。

大半の車は黒く焦げ付き、燃え上がった痕跡をとどめていた。

ふしぎと臭いはしなかった。ガソリンの臭い、焦げた焼け跡の臭い。大風が吹き飛ばしてしまったのかも知れない。

人の気配はいっさいしない。車の多くには人が乗っていたはずだ。全員が逃げ切れずはない。

探せば、遺体くらい見つかるのだろうか。

原田は首をふって、車の残骸を乗り越えた。

\*

原田は夢を見るようになった。

中年になって仕事が忙しくなると、目覚めに夢を反芻すること自体が減った。見なくなったのだ、と自分では思っていた。日常の忙しさが、夢見た記憶を押し流してしまっただけなのだ。

だが、いまは鮮明な情景が朝になっても消えない。

それは、原田の自宅だった。リビングに妻と子どもが居て、電灯色のランプに照らされている。夜だろうか。それにしても、カーテンが開かれ、小さな庭が見えている。隣家を隔てる生け垣と、野菜を育てた花壇がある。二人は何か話をしているのかもしれない。娘は、妻とよく学校や友だちの話をする。何の話題だろう、妻は口元に微笑みを浮かべている。

机の上には新聞が載っており、紙面が開かれている。

日付は、あの日だ。

原田は出張中だった。家には居なかった。だから家の様子を見たはずはない。空想

だと分かっているにも、異様に鮮明な夢は現実そのものと思えた。

妻の声が聞こえる日もあった。

「みなみに、みなみに、みなみに、みなみに……」

「あなたも、あなたも、あなたも、あなたも」

言葉がエコーのように、ただ繰り返されるのだ。

「やめといたほうがいいですよ」

声がある。原田はぎくりとする。

「南がどうなっているのか、皆目分からないんだから」

「ああ、いや」

知人だった。出張先からK市までたどり着き、途方に暮れていた原田に声をかけてくれた恩人だ。環境の悪い避難所に押し込められたら、先に進むめども立たなかったろう。

「行ったところで、どうにかなるわけでもないでしょう」

原田は今朝、知人の家を出ると告げたのだ。

「いつまでも、迷惑はかけられない」

「遠慮してる場合じゃないでしょう」

「もう、決めただ」

「立ち入りが禁じられてるじゃないですか」

「嚴重じゃないと聞いた。行こうと思えばいけるんだ」

「行って遭難しても、救助はきませんよ」

「分かってる。誰も救助には行けない。だから、おれが行く」

「そんなにご家族のことを……」

原田は家族の話は何度もした。生きていくような気がする、会えるかも知れない、帰って会いたい、無事を確かめたい。根拠を聞かれても、何も答えられなかった。同じ話を繰り返した。理屈で納得できる内容ではない。同情気味だった知人も、今ではうんざりしているだろう。原田の家族とは面識がないのだ。

「どうしても、自分の目で確かめたい」

脱出できた者はほとんどいない。

N県は過疎地が多いが、それでも百万をはるかに越える人が住んでいた。災害の規模は、原田の想像力を超えていた。

K市内は混乱が収まっていなかった。ガスも電気も復旧しておらず、水道も不定期の給水車か古い井戸に頼っていた。一部の輸送機関は動いていたが、それも市内だけだった。街に多くの難民を養える余裕はなかった。

南に向かう公共交通はない。

K市の境界付近から立ち入り禁止地帯が始まる。封鎖線に自衛官や警官が立つところはあるが、大半はテープすら貼られていない暗黙の境界線だ。安全は保証されず、捜索隊が入ることもない。

倒壊した住宅が至る所に見られる。

風はここでも一様に吹いた。窓を壊し、屋根を舞い上げ、車を吹き飛ばし、電柱や鉄塔をなぎ倒した。残っている方が幸運なのだ。北東から吹き付けてきた津波のような空気の壁は、あらゆるものを破壊した。

復旧はほとんどなされていない。だれも終わったとは思っていない。



恐怖はまだそこ、南にある。

\*

異変の中心はN県のY町付近と推測されている。Y町の上空十キロで爆縮が起こった。そのメカニズムは明らかではない。中心部に真空状態が生じ、猛烈な勢いで周辺の大気が流れ込む。空気は巨大な渦を、台風を何十倍にも増幅した暴風を発生させる。ゼロヘクトパスカルの台風だ。直径四十キロの範囲内は、秒速二百ノットをはるかに超える風が吹いた、と考えられている。

記録がない。

現象を観測する手段が失われていたのだ。爆縮が起こると同時に、強烈な電磁パルスが発生する。E1からE3レベルまでが混在したノイズは、大半の電子機器の焼損か動作停止を招く。ほぼ日本列島全域で、飛行中の航空機はコントロールを失い、鉄道、車両、船舶はすべて動かなくなった。大風の範囲外にあった通信、電源設備も、

複数箇所で大災害を発生し機能を停止した。

奇妙なのは、その破滅的なノイズが、範囲を縮小しながらも持続していることだ。人為的な核爆発ならば、短時間でノイズの発生は終わる。E1のような電磁パルスは、十億分の一秒しか持続しない。それがいつまでも不定期に発生し続ける。連続核爆発に相当する巨大なエネルギーだった。太陽フレアに相当するE2や長周期のE3となると、大規模に作り出せる手段がない。

以来、直径四十キロの左回りの渦は、分厚い雲を伴って消えることなく上空にとどまっている。その中ではノイズが絶えることはない。ただ、台風並みの断続的な強風は残るものの、爆縮由来の暴風はもう地上を吹き荒らしていない。数百メートル上空に渦巻くだけだ。気象衛星の画像には、この雲が写っている。しかしレーダーや赤外線電波はノイズに遮られ、雲の下に何かあるのか手がかりを得る手段がない。

半径四十キロの範囲内にはN県のほぼ全域、隣のO市近郊の三分の二、M県の三分の一が含まれる。嚴重に遮蔽された特殊車両を除けば、侵入は危険を伴う。金属類はイオン化された電荷を帯び、揮発油を燃料にするエンジンは爆発の恐れがある。電子

機器は全く動かない。圏内を含む半径六〇キロは、立ち入り禁止区域となった。ノイズの影響が少ない周辺の復旧が優先され、人手に頼らざるを得ない圏内は、救助どころか調査も不十分なままだ。

湾岸で数十万人の死者を出した〇市の惨状を踏まえ、音信が途絶えたN県の百万人の生存はほぼ絶望的とされた。

\*

県境まで二昼夜をかけて歩いた。持参した食料は残り少ない。

N県は東西と南を山で囲まれている。北側だけが河川が作る河岸段丘となって、外に開かれていた。徒歩で入るとしたら、ここからが楽だろう。だが、その川を渡ることができなかった。

これまで原田は、川を右手に見た山沿いを南へと下ってきた。最後に渡河する必要がある。いくつもあったはずの橋が、ことごとく落ちていた。風なのか、突発的な増

水なのかは不明だ。川幅は、原田が記憶していたより、はるかに広がっているように思えた。やむを得ず、川に沿って東に向かう。

しばらく進んだあたりで、国道の道路橋が大きく折れ曲がり川面に落ちていた。そこに上流から流れ込んだ土砂や流木が積み重なって、ダム湖のような水面ができていた。水量が少ない今なら、橋の残骸の上を辿れば渡れそうだった。人が通った後のない荒れた斜面に飛び降りると、一歩ずつ進んでいく。

対岸は住宅街があるはずだ。

しかし、泥まみれになって護岸堤を乗り越えた先には、意外な空間が広がっていた。何もない。

文字通り何もない平面だった。水平なのかどうかは分からないが、まるで氷の上のように真っ平らなのだった。

辺りは丘陵を住宅用に切り開いた土地だ。造成されたばかりの宅地でも、丘の高低は残っている。多少の段差くらいあるのがふつうだ。

風のせいかな。

風で、何もかもが吹き飛んだのか。

原田は呆然としながらも、ともかく歩いた。めざすN市はまだこの先にある。

土台の跡すら見えない。

二日間さまよった荒野とは明らかに違う。原田は、競技場のアンツーカーを思わせる赤っぽい地面を歩きながら、不安が膨らむのを感じる。

何があったのか。

陽が差さず磁石の方位も狂う中では、正確な位置や方角がつかめない。残骸の痕跡を目印に、ここまで来れたのだ。だが、もしこの先何もないとすると、目的地にたどり着けるかどうか怪しくなる。

歩くうちに、空の明度が失われた。夜になる。

これまでの二日間は、何とか軒のある建物を探して仮眠してきた。ここでは無理だろう。

どうするか。

すると、前方に夕焼けに似た明るさが浮かび上がってきた。この平面の先、地平線

の彼方が明るいのだ。渡河の位置が思っていたとおりなら、そこからN市の市街まで五キロほどある。

ふつうなら闇夜を歩くのは危険だが、休める場所もない。行けるところまで進もう。

疲れはあるものの、原田はできる限り早足で歩いた。躓く障害物はないのだ。

一時間近くは歩いただろうか。明るさの底に複数の建物らしい陰が見えるようになった。

街だった。

街灯だろうか、照明が灯っているのだ。

街路灯ではなかった。

一〇メートルほどの空中から、下向きに光が落ちている。LEDのように指向性があるが、ゆらゆらと揺れて見えた。ナトリウム灯を思わせるオレンジ色の光だ。一つではない。格子状に規則正しく、見渡す限り配置されている。下にある町並みとは無関係に等間隔で並んでいた。

ここだけ、電気が来ているのか。

あの電灯はどこで固定されているのだろう。周囲に同じ高さのビルはなく、架線も見えない。まるで空中浮遊しているようだった。

街は、何もない平地から急に始まっている。平屋や多くは二階建ての家屋だった。ここまで見てきた町並みとは全く違って、災害の影響を受けていない。平穏なままの町が残されている。

歩みを緩めると、原田は街路に足を踏み入れた。道沿いの街路樹や家屋の塀などに手を触れながら、慎重に歩いた。

全体がオレンジ色に染められた、現実感のない光景だった。

等間隔の光は陰を作る。拡散の少ない強い光なので、一つずつの灯が狭い範囲だけを照らしていた。照らされたところとそれ以外の闇とが、真夏の日中のように、強いコントラストを描き出している。

誰もいないのか。

陽が落ちて間もない時間だ。もし街に被害がないのなら、外を歩く誰かがいてもお

かしくないはずだ。

原田は道沿いの住居のインターホンを押してみた。窓は暗く、家屋からは何の物音もしない。電気製品が毀れているだけかもしれないが、人の気配もない。声を上げて呼びかけ、数軒繰り返したが同じだった。

無人なのだ。

住居表示から、少なくともここがN市であることは分かった。原田の自宅まで、さらに一時間ほど歩く必要がある。昔の街道筋で、地理的な配置は異変前と変わらないようだった。

しかし、道筋に起伏はない。盆地の底近くで緩やかではあったが、昔の谷や丘などを反映した起伏があったはずだ。それが失われていた。

上空には格子状の照明が無数に光っている。さらに上の雲海から、雲のシルエットを際立たせる稲光に似た発光が見られた。ずっと遠くなのか、雷鳴は聞こえない。

街はオレンジ色の光に照らし出され、どこまでも続いている。

半時間ほど歩いたあたりで、動くものが見えるようになった。



車だ。

それも一台だけではない。何台も動いている。

見ると、遠くの交差点を通り過ぎていく。ここまでは、車は見かけなかった。上空の照明灯を除けば、すべての電子機器は、強烈な電子ノイズで死んでいるはずだ。車の電装部品も同じだ。

その車が走っていた。もともとの地図どおりなら、あのあたりはN市有数の繁華街になる。頻繁に渋滞になるほど車が多かった。

誰かいるのか。

原田は足を速めた。

歩道に人影が見えた。一人二人ではない。まるでいつもの夜のように、多くの人が歩いている。

生存者なのか。

原田の左横を車が通り過ぎた。

からからからから。

タイヤが路面を噛む音だけがした。唸るようなエンジン音や、EV車特有のモーター音は聞こえなかった。車内は暗く、運転者は確かめられない。

交差点は、車線一杯に車が走り、歩道も人が溢れている。しかし信号は切れていて、商店の看板や店内の照明は何も点いていなかった。ここまでと同じ、オレンジ色の光があるだけだ。

人声がしない。人々は黙々と歩いて行く。

原田は通行人を呼び止めようとした。

「ここは大丈夫だったのですか」

若い男女や中年の男性、旅行者のようなトランクを引く夫婦、人々の年齢や服装はまちまちだった。だが、彼らには表情がなかった。

「ちよっとお話しできませんか」

話しかける原田は、いなかったかのように、平然と無視された。

その横を、乗用車やトラックはヘッドライトも点けず、無音で走りすぎる。満員の乗客を乗せた乗り合いバスが、停留所に止まらないまま走り去って行く。

南に向かっていた。

原田は人の流れに巻き込まれながら、同じ方向に進んだ。めざしていた原田の自宅は、N市の南西にある。これだけの人がいるのなら、生き延びたのではないか。原田は仄かな希望を抱いた。

人いきれに囲まれているのに、いつもの雑踏と同じではなかった。革靴やヒールが地面を蹴る乾いた音があるだけで、人の声がしないからだろう。

どこまで行っても、街の様子は同じだった。何の損傷もない家屋なのに、人の気配は一切ない。商店はシャッターを閉じたまま。車通りを除くと、生活道路はどこも人がいない。すべてが、オレンジ色に染められている。

見上げると、格子状の照明はまだ見渡す限り続いていた。そこから真下にスポットライトのような強い光の箭が投げかけられ、道路の上に等間隔の円を描く。人々は厭うことなく光に照らし出され、黙ったまま闇へと歩きすぎて行く。

「どちらまで行かれるのですか」

思わず横を歩く男に話しかけるが、こちらに眼をやろうともしない。

原田は、半時間ほど歩いたあと集団を離れた。横筋に抜けても、人々は原田に無関心だった。

もうすぐだ。

原田は気持ちが高ぶるのを覚えた。ふだんよく歩く町並みだ。家の形や街路の様子は同じだった。帰って来れたのだ。

自宅は、原田が出かけたときそのままあった。結婚後に古い住宅を買い、何年かけて気が済むまで手を入れた家だ。

インターホンでためらったあと、門扉を抜けるとすぐにドアを押し開いた。

「ただいま」

玄関で小さな声を上げた。オレンジ色の光が、ドアの明かり取り窓から見えた。

廊下は暗く返事がない。

靴を脱ぎ捨て、玄関に続く居間に入る。庭向きの窓はカーテンが引かれていない。

外のオレンジの光で、室内もよく見えた。

妻と娘が食卓の椅子に座っている。

生きていたのか。

「良かった、だいじょうぶか」

ようやく会えた安堵の気持ちから声をかけた原田は、一瞬、えたいの知れない恐さを感じる。確かにここは自分の家に似ているし、妻と子は家族のように見える。でも本当にそうなのか。オレンジ色に満ちた室内の様子は、見慣れたものではなかった。すると、妻が答えた。

「だれ」

「だれって、帰ってきたんだ」

「だれなの」

聞いたことのない高い声を出す。

「急いで戻ろうとしたんだ」

「あれから、なんにちもたつの」

原田を難じているのだろうか。

「戻ろうとした。でも戻ってくる手段がなかった。交通は止まっていたし、立ち入り

が禁止されていた。無理だったんだ」

「ずいぶんじかんがかかった、なんにちもなんにちも、ずいぶんじかんがかかった。いつだろう、いつはじまるんだろう、いついくのだろう、いつだろう」

こんなしゃべり方をする妻は初めてだった。違う話をしている。

「何のことだ」

「もうはじまるの」

妻は庭に顔を向ける。

「ごらんなさい、このにわもわたしもむすめもいる。いつもどおり、なにもかわらない、なにもちがっていない。もうじゅんぴはできたの」

「準備って何の話だ。何の準備だ」

「あなたはだれ」

原田は焦燥感に駆られる。

「悪かった、おれが悪かったよ。ここでは風は吹かなかったのか。何もなかったのか」  
「かぜ」

「何もかも吹き飛ばす風だ。車も人も家も」

「かぜ、なんて、しらないわ」

妻はとぎれとぎれの奇妙な口調で言った。

「あなたはしってるの」

「風のこととは……」

「わたしがだれだか」

「だって、お前は」

原田は、妻の名前を言おうとして混乱する。名前が出てこない。あれだけ鮮明な夢を見て再会を望んだのに、妻の名を思い出せない。

「ほら」

「いや、ここはおれの家で」

確かにこの家から出張に出たはずだった。でも、それならなぜ。

「ちがうの」

そのとき妻は小さな笑みを口元に浮かべた。

「あなたは、ちがうの」

「い、か、な、きゃ」

娘が急に立ち上がって叫んだ。

「い、か、な、きゃ」

「どこに行くんだ」

「い、か、な、きゃ」

妻と娘は、原田をすり抜けるようにして玄関に向かう。

「待ってくれ、どこに行くんだ」

妻は振り返り、こう言う。

「みなみに」

言葉には感情はなかった。

夢と同じだった。

二人は玄関にあったサンダルを履くと、原田がたどった道を逆に歩いていった。部屋着のまま、手荷物も持っていない。



「待ってくれ」

声は無視される。南に向かう集団が移動する道で、妻と娘は人々と合流した。

原田は後を追う。

人波にもまれて歩くうちに、ここがもとのN県と違うことを、原田はようやく理解することができた。街は、見知ったものとは違う別の街だった。

妻も娘も別人かもしれない。あれほど固執していた家族との再会、原田を駆り立てた感情は何がもたらしたのだろうか。本当に自分に家族はいたのか、いつ結婚していつ子供ができたのかすら、確信が持てなかった。

だが、ここまで来て二人を見捨てられない。まだ諦めきれない。追うしかなかった。生きている限り一緒に居たい。

群衆は一つの通りだけではなく、幾筋もの流れとなって南に進んでいた。

そうか、と原田は気がつく。南には爆心地がある。あらゆる現象を産み出した原因がある。彼らは、呼び寄せられているのだ。

しかし、自分がなぜそんなことを思いついたのか、分からなかった。

道のりは長い。

南に進むほど道路は減り、二車線ほどの自動車道だけになる。その横は、まばらな住宅と田畑らしき空き地なのだ。田圃には何も植えられておらず、オレンジ色の平面だけがある。途中まで作られ、未完成のまま放置された空白部分のように見えた。

人だけで、道路は一杯になる。無音で動いていた自動車が、あちこちで乗り捨てられていた。

北辺のN市から爆心まで四十キロはある。もう夜遅くなるはずだし、たとえば歩くにしても十時間近くかかる距離だ。だが、一人も脱落せずに行進は粛々と続いた。原田は二人を見失わないように、疲れを押さえ込んで追いかけた。

照明は、どこにも切れ目がなのまま、頭上から人々を照らしていた。時刻の感覚が麻痺していく。深夜なのか、朝なのか分からなくなった。

もう山間に入っていなければならぬ距離だが、高低差がないから見晴らしがきかない。人の背中だけがみえる平らな道を歩くだけだった。

やがて、道が終わる。

広場のような、野原のような平面に、人々はばらばらに散っていった。居場所を探すようにしばらく彷徨い、人波の隙間を見つけると立ち止まる。大勢の人がいた。一人一人が孤立して立ち、夫婦なのか親子なのか友人なのか、もう互いの関係を知ることもできない。最初携えていたはずのバッグや荷物は、移動の過程で捨てられたのか、誰もが手ぶらだ。

原田は、気がつくのと妻と娘を見失っていた。

声を上げるが、返事はない。

左右を見回す。あつという間に、最初の位置さえ分からなくなった。行けども、見知らぬ人々が立ち尽くしているだけだ。何人いるのか、途切れることなく、人だけで平面を満たしているようだった。

話し声はない。

ここには、N県の百万人が全ている。原田は実感を持ってない。県内広域のあらゆるところに居たはずの人々が、何かを目的に集まっているのだ。

いや、何かを待っているのか。

立ち止まった全員は、上空を、同じ方向を見上げる。

光が動いた。

頭上の照明群が一斉に動いている。照明が視界から消えるにつれて、広場の見通しも効かなくなっていく。

すると、雲に映る微細な光が見えてきた。目が慣れてくると、渦巻く分厚い雲が、うねうねと蠢く様子を見分けられる。

雲間に何かが見れる。透明な紐のようなものが幾重にも絡まりながら、下へと延びて行く。大きさは分からないが、下に進むほど塊はほどけ、一本一本が独立した紐になっていった。紐は分岐し、細い繊維状の何かに変化し、もう一段分岐する。放射状に広がる紐は、みるまに空を覆いつくしていく。

紐は、一斉に白く発光する。

広場は直射日光並みの白色光に照らされた。影を失うほどの眩しさに、原田は思わず目を覆う。だが、人々は目を見開いたまま、光を凝視めているようだった。

真っ白の細い糸が降ってくる。風の影響などないかのように、真っ直ぐに下りてく

る。目の前まで来ると、もう糸の細さではない、腕ほどある鞭状のものだ。それは大きく撓ると、地面を打ち据えた。重い音がして、巻きあがった鞭には人が数人捉えられていた。至る所で叩き付ける音が響いた。

見渡す限り、鞭は人を鹵獲しては、猛烈な速度で引き上げていく。

雑草を鎌で刈り取るように、人を刈っているのだ。

原田は本能的に体をかがめ、身を隠そうとする。隠れる場所などなかった。しかし他の人々は、まったく姿勢を変えない。

黙って捕まるつもりなのか。それが目的だったのか。

すぐ背後で、鞭が打ち付ける音が響いた。一瞬で巻き取られた人の顔が見えた。妻がいた。原田は無意識のうちにナイフを抜いていた。

気がつかなかったが、人々が身に帯びた金属類が火花を上げていた。ここでは電磁嵐が続いているのだ。

こんなもので何ができるのか。原田は躊躇する暇もなく、迫る鞭にナイフで切りつけた。セラミックの刃は、吸い込まれるように鞭を突き通した。白い閃光が走って、

原田は視界を失った。

鞭が消失していた。数人が倒れていて、その中に妻もいた。助け起こそうと近寄ったが、妻は原田を制して一人で立ち上がる。

「あなたが、いても、いみがない」

「意味ってなんだ。これに意味があるのか」

「このために、みんなは、いる」

「なぜだ、あの上に何がある」

「きろくするもの」

「ここにいるのは、みんな人間だろう。何を記録する」

「わたしたちは、じつざいしない」

「ここにいるじゃないか」

「ここだけでしか、そんざいできない。ここは、ふかこうりよくで、なにもかもが、はかいされてしまった、こうやだ。なにもものも、いきてはいない。しかし、じかんをかけて、さいせいはできた。いきているかのように、ゆめみられた」

そう言うと、妻は口元にあの微笑みを浮かべた。

「あそこには、ゆめみられたものだけがいく」

妻に手を伸ばそうとしたとき、後方からきた鞭が原田を弾き飛ばした。地面にたたきつけられ意識を失う直前、原田は上空の雲が渦を広げ、中央がぼっかりと開いているのを見た。

\*

光が差し込んでいる。

真上にまばゆい光がある。

青空があった。雲ひとつない真っ青な空で、ただ太陽だけが輝いている。巨大な嵐の雲、電波を遮る渦、人を寄せ付けない未踏域は、すべてかき消されていた。

原田が体を起こすと、そこは見渡す限り、地平線の彼方まで、赤茶けた平原が広がっていた。何もない。雑草も石ころも、何も見当たらなかった。